

## P1-022

## A大学における看護大学生の心理社会的発達

小野 安佳里<sup>1</sup>、中新 美保子<sup>2</sup><sup>1</sup>川崎医療福祉大学大学院 保健看護学専攻、<sup>2</sup>川崎医療福祉大学 保健看護学科

## 【背景】

新型コロナウイルス感染症の流行により、看護基礎教育においては、これまで通りの講義や演習、実習を行うことができない状況が続いている。制限のある中でも、教育の質を担保するとともに、より一層効果的な学生指導を行うことが求められている。学生の学びには指導者側の要因だけでなく、学生側の要因も関係があることが先行研究において示されている。本研究の目的は看護大学生の心理社会的発達の状況を明らかにすることとした。

## 【方法】

A大学の学部生 4012 名を対象に、エリクソン心理社会的発達段階目録を用いて、無記名式の Web 質問調査を実施した。調査期間は 2021 年 11 月末～2022 年 1 月であった。看護大学生とそれ以外の医療系大学生間で Mann-Whitney の U 検定、看護大学生 1 年生～4 年生間で Kruskal-Wallis 検定を行った ( $p < 0.05$ )。分析には SPSS ver.23 を使用した。本研究は所属施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

## 【結果】

有効回答 1157 名を分析対象とした。看護大学生 154 名、その他の医療系大学生 1003 名であった。看護大学生とその他の医療系大学生間は、1 年生・2 年生は 2 群間に差は見られなかった。3 年生は、同一性と統合性において看護大学生が有意に高かった。4 年生は自主性において看護大学生が有意に高かった。看護大学生の学年間比較では、信頼性において、2 年生は 4 年生と比較して有意に低かった。その他の下位尺度では学年間で有意な差は見られなかった。

## 【考察】

3 年生の看護大学生は、領域実習を通して、この自分でよい、これからもこの自分で看護を学んでいけるという自信をもつことができたことが、同一性の感覚となっている。また、様々な対象と出会い、関わっていくことで、生や死について考える機会となり、成功・不成功にかかわらず自分の過去を受容していくという統合性の感覚となった。4 年生は就職活動や卒業論文の作成などを通して、積極性や決断、またそのことに責任をもつという自主性の感覚となっている。看護大学生の学年比較においては、2 年生は専門科目の講義が大半を占めるようになり、また、初めての本格実習を控え、自信の低下や不安から、信頼性の低下につながった。看護大学生は、様々な経験を通して心理社会的にも発達させていく途上にあり、学生の特性に配慮した指導を行うことが必要であると考えられる。

## P1-023

自閉スペクトラム症幼児の共同注意の発達  
が母親の育児ストレスに及ぼす役割永井 祐也<sup>1</sup>、金澤 忠博<sup>2</sup><sup>1</sup>岐阜聖徳学園大学、<sup>2</sup>奈良大学

## 【目的】

本研究では、自閉スペクトラム症 (ASD) 児の母親の育児ストレスに影響する ASD 児の初期兆候として共同注意の発達に着目して検討した。

## 【方法】

児童発達支援センターに通園する知的障害幼児 (CA47.05 ヶ月齢、DQ50.30) とその母親 (年齢 36.95 歳) 57 組が参加した。母親に対して質問紙と面談を行い、児の共同注意の発達 (共同注意行動尺度)、ASD 傾向 (SCQ)、不適応行動 (Vineland- II)、母親の育児ストレス (PSI) を評定した。ASD の診断のある児が 29 名 (ASD 診断群)、未診断で SCQ のカットオフ値以上の児が 15 名 (ASD 傾向群)、SCQ のカットオフ値未満の児 13 名 (非 ASD 群) であり、3 群の CA、DQ は統制されていた。また、SCQ 得点は、ASD 診断群と傾向群で同程度であった。本研究は、大阪大学大学院人間科学研究科行動学系研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

## 【結果】

(1) 3 群の比較：ASD 診断群と ASD 傾向群の児の共同注意の発達は、非 ASD 群よりも有意に低かった。ASD 診断群と ASD 傾向群の児の不適応行動は、非 ASD 群よりも有意に高かった。また、ASD 診断群と ASD 傾向群の母親の育児ストレスは、非 ASD 群よりも優位に高かった。

(2) 母親の育児ストレスと児の特徴との関連：母親の育児ストレスは、児の共同注意の発達、SCQ 得点、不適応行動と相関していた。また、児の共同注意の発達、SCQ 得点、不適応行動も相関していた。そのため、媒介分析を行った。児の共同注意の発達は SCQ 得点を媒介して不適応行動に影響していた。不適応行動を共変量に投入して媒介分析を行った結果、同様の媒介関係が成立した。

## 【まとめ】

3 群の比較から、ASD 児の共同注意の発達や不適応行動、母親の育児ストレスの問題が大きいことが示された。また、共同注意の発達が SCQ 得点を媒介して不適応行動に影響していたことから、ASD の主症状の 1 つである社会コミュニケーションの初期症状にあたる共同注意は、児の不適応行動の予測因子である可能性が示唆された。さらに、ASD 児の母親の育児ストレスと強く関連する児の不適応行動を共変量に投入しても、共同注意の発達が SCQ 得点を媒介して母親の育児ストレスに影響していた。以上より、ASD 児の母親の育児ストレスを軽減するためには、共同注意の発達支援が重要であることが示唆された。